

「水は川上、さくらは神野、夏は多布施の舟遊び、フツと見そめた娘の肩に、憎くや螢が飛んで来る

「映る灯かけは、江瀬端通り、恋の今宿宵の口、三味や太鼓のアノさどめきも、更くれば田いお月さま

新民論 佐賀はよいとこ

「佐賀はよいとこ、城下町、楠の若葉もソヨくと、エー暮れりや、白山人通り、ともる鈴蘭、花の町、ホ

ンニ、ヨカナイ、ヨカトコロ

「水郷川上夕涼み、紅い雪洞屋形船、エー浮いて流れりや神野のお茶屋、水に螢が身を焦すホンニ、ヨカ

ナイ、ヨカトコロ

第十九編 観 光

第一章 観 光 地

第一節 観 光 協 會

佐賀が雄藩の後として、その施設の見るべきもの種々あり、殊に明主鍋島直正（閑叟）は長崎警備の関係等より、泰西諸国の文物輸入に力を致し、文学、兵備、衛生その他全国に魁けて為せる事業は尠からぬ程であつたが、明治維新と共に多くば其跡を絶ち、世の推移に伴ひ、現今ではたゞ一の語り草として伝ふるに過ぎざる

も亦多く、佐賀観光の点に於て甚だ寂莫の感なきにあらず。

會て大正二年五月五日、米國觀光團ウキルバー一行十名の觀光客を迎へたことがあつた、此の時まではマダ觀光設備も整つて居らず一行を優待して、纔かに數ヶ所を觀光せしめたに過ぎず、其後追々各地の觀光團当市に来るもの多く、一面佐賀市も亦郷土宣伝の意も加はりて、觀光施設にも着手するに至り、昭和十年十月一日佐賀市觀光協会を組織し、此等の觀光客に便宜を与ふべく、佐賀駅を起点として、一時間コース乃至三時コース、或は半日コース、一日コース等の觀光コース其他の施設を為し、市役所産業課に於てその事務を執り、之が斡旋を為すこととしてゐる。

第二節 觀光地説明

佐賀城址

龍造寺氏の居城であつた村中、水ヶ江兩域は隆信の死後、城の総普請を為し鍋島氏歴代の居城となり、周圍一里の城濠を廻らし、構築堅牢である、一名を亀^{きつこうじょう}甲城と称してゐたか、明治七年佐賀の乱に大半烏有に帰し、現在は国守の居室と、当時の佐賀軍より放つた弾痕を止めたる城門(鏡ノ門)天守閣跡及び一部の城壁を存するのみで、旧態を止めざるも天守閣跡に登りて四顧すれば、其の規模の大にして、備への周到であることを思はしむるものがある。

閑叟公銅像園

北堀端の佐嘉神社西側に衣冠束帯の立ち姿、儼然として立てるは、大納言鍋島直正(閑叟)の英姿を鑄たる銅像である、明治四十一年以来旧藩士民有志、其徳を追慕し相謀りて建設せしところ、大隈



鍋島直正の銅像

重信侯を委員長として事業を進め、大正二年十一月十日盛大なる除幕式が挙行された、其左側に公の近侍で公に殉死した古川松根（興）の銅像を附設してある。

銅像園内には各種の樹木を移植し、銅像園として又散策地として最適の地である、閑叟公銅像の前に建てある「忠勲之碑」は、公の功績を讃へたる記念碑で、明治四年正月廿三日伯爵鍋島種臣の撰文で石材は伊太利国産の羅馬石を以てし、堅牢美麗である、初め、松原神社の傍に此碑石を建て、あつたが、銅像園成るに及び、此処に移転されたものである。

弘道館趾 佐嘉神社の附近一帯は、旧藩齋弘道館の跡である、

当地の弘道館は日本三弘道館の一として有名であつたが、明治維新後廃止せられ、其跡の一部に勸興小学校を設けられたるも就学児童の年々増加するに従ひ、大正三年一月現校舎を新築して是に移転した（弘道館及び勸興小学校の事は本史教育編参照）、現今徴古館と市公会堂の中間に「弘道館記念碑」を大正十二年三月建設して、館の所在を示してあるが、当時の弘道館は規模宏大にして東西四丁南北三十餘間あつたと云ふ。

佐嘉神社、松原神社（神社仏閣偏に譲り爰には之を略す）

徴古館 閑叟公銅像の西側に、ラクシツク（古典）の建物あるを徴古館と云ふ、鍋島侯爵家の建設する所で、

昭和二年十月廿八日落成式を挙げた、先哲偉人の遺品、其他の古書画、著書、武器、古器物、商工関係参考品、及び郷土資料を蒐集して之を一般に公開し、郷土史並に社会教育に裨益を与へつゝあり、出品は鍋島家の家什最も多く、各個人出品をも受託保管して陳列せらるゝもの尠からず智能啓発上、頗ぶる有益な企である（入場一人金五錢を要す）

龍造寺隆信公碑 戦国時代、島津、大友と共に九州の三豪と称せられた、五国二島の太守龍造寺隆信は、龍造寺周家の長男として享祿二年二月十五日、佐賀水ヶ江城東ノ館に生れ、武勇の誉れ高く、幾十度の合戦に遂に、肥前、肥後、筑前、筑後、豊前及び壱岐、対馬を征服し、覇を九州に唱へ、尙ほ為す所あらんとせるも、島原に於ける薩摩の島津軍との一戦に戦ひ利あらず「紅爐上一片之雪」の辭世の一句を遺して、戦場の露と消え

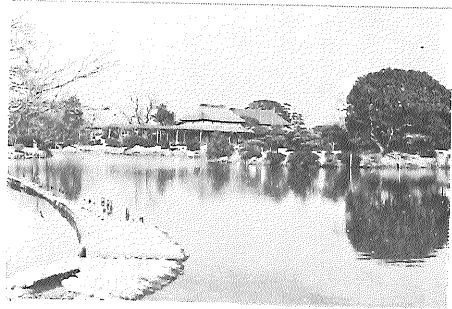


鍋島直茂の銅像

た、実に痛惜の至りであつた（本史上巻第二編）
此英傑を思ふべく「隆信公顕彰会」を組織し、その事業の一端として、誕生地たる東ノ館跡たちあごに記念碑を建設し、昭和四年四月廿五日鍋島直映侯の臨場を得て、盛大なる除幕式を挙行したが、顕彰会では年々四月廿四日、記念碑前で其祭典を行つてゐる。

直茂公銅像園

藩祖鍋島直茂の盛徳を追慕し、旧藩民有志、日夕其の英姿を仰がんとし



神野公園園

て上多布施町宗智寺境内の縁りの地に銅像を建て、大正十三年十一月九日鍋島直映侯、親しく臨場して盛大な除幕式を挙行された、銅像は佐嘉城の浮沈を賭けた元龜元年八月二十日、佐賀郡今山に豪敵大友親秀を破り、凱旋せる直茂の武威凜然たる馬上甲冑の姿である、建設委員長は本市長野口能毅にして広く一般有志の義捐を求め、三年一ヶ月の日子を要して完成し、銅像園内には「プール」などの設備をも為し、総経費六万一千餘円を投じてゐる、境内の寺院は直茂晩年に至り、此地に隱居所を設け此処に長逝した所で、其子勝茂遺命により、茲に寺院を創設し、

直茂の法号に因みて「日峰山宗智寺」と称した、現在の寺院が即ちソレである。

多 布 **神野公園** 上多布施町、多布施川の畔にあり

施 弘化三年旧藩主鍋島閑叟の經營せる別荘にして園内には多布施川の清流を引き、池を掘り築山に清は嵐山を模して松桜等を配し、頗ぶる雅趣にして眺望に富み、四時遊覧の佳境である、大正十二年三月鍋島直映侯、襲爵記念として其土地、建物、樹木一切を挙げて之を佐賀市に寄附せらる、佐賀市

では、一般公衆の用に供すべく公園として之を拡張し、運動場その他の設備を施してゐる。

多布施の清流 川上川の下流、石井樋より分岐し佐賀市街に入る、之を多布施川と云ふ、水清冽にして河底の白砂は、堤塘松並木と相映じて情趣擲すべく、盛夏の候、或は秋半月明の夜、流れに棹して舟遊を試むる者多し。

万部島 万部島は旧城内に在り、水ヶ江城の城主龍造寺家兼、神社仏閣に対する信仰殊に浅からず、永正三年(紀元二一三)三月、禅僧三十四名を請し、法華經一萬部を誦誦し森嚴なる法供養を営み、写經を城の鬼門に方たる此地に奉納して、国家安全、子孫繁昌を祈願した、是れ万部島の名の起れる以所である、又牛島天満宮境内にも同様の奉納ありしと云ふ、家兼は豫て大乘妙典を誦誦せしめてゐたが、既に一萬部に達せるを以て、天文七年二月中旬、所願成就の供養を行ひ、自ら剃髮して「剛忠」と号した、時に年八十五歳であつたと云ふ、其後万部島飛崎社は鍋島氏に至り、益々整備孤張して向陽軒と称したが、鍋島光茂元祿十一年七月廿三日、十二社の神を奉祀し之を向陽軒と称したが、降て鍋島重茂、延享元年正月廿四日、龍造寺隆信、同政家、同高房の三靈を此に勧請した、後此の三靈神は別に社殿を佐賀郡春日村の久池井に建て敷山社と唱へ祭典を執行せるが、明治六年十月九日市内の松原神社に合祀して今はなし、万部島向陽軒の祭典は總て藩主に於て行ひ、其頃は藩主一族の外、一般の入場を許さず、尤も清淨森嚴な靈場で當時は周圍に城濠を繞らして島を為し、佐賀藩主の襲封に際し、領内の天台僧を招致し國土安全、武運長久を祈禱、誦經した法華經一萬部づゝを埋めた万部塔が、龍造寺家兼以来、鍋島直正(閑叟)に至るまで十一基の累代の碑がある、今は纔かに家兼以下鍋島代々の経塔を存してゐる。

万部島招魂碑

元は城内西ノ門にあつたを茲に移した、明治七年佐賀の役に犠牲となりし征韓党の江藤新平、愛国党の島義勇以下二百餘名の戦歿者の霊を祀る、明治十九年の建碑で碑の文字は長崎の書家小曾根乾堂の揮毫である、此碑に附属せる土地二千七百八十六坪あり、是より生ずる収入を以て、年々の祭典を執行してゐた。



万部島招魂碑

然るに其前年即ち明治十八年四月、興賀町川原小路にも亦同志を祭る招魂碑が建つて、同様の祭典を執行してゐた、蓋し当時建碑に當りて、関係者間に意見の一致を缺きたる結果、斯く両所に建設されたものらしい、其後同一志士を各別に祭るの無意義なること、また維持上にも支障を感じるものあり、両者合併の議起りて、長谷川良之、野口能毅、狩野雄一、青木助次郎、横尾義勇等を交渉委員とし、双方の関係者と数回会合の末、大正八年三月、両所の招魂碑及敷地等を市に寄附し、更めて地を万部島に卜し、西ノ門の招魂碑を移し市に於て管理經營し、毎年四月十三日盛大なる祭典を執行しつゝあり。

牛島天満神社

太宰小式藤原資頼、建久年中、筑前太宰府へ下向し、其後佐嘉府巡視の節、国家安全の爲め太宰府天満宮を当地へ勧請した、初め牛島に鎮座せるが、永正二年三月龍造寺剛忠再建し、同時に万部島同

様、法華經一萬部納經の石碑を建て、鍋島直茂、佐賀城築城の際、鬼門除けの爲め現在の所に遷座、寛永十年鍋島勝茂石の鳥居を奉納し、同十五年五月社門を建立した、当社には後陽成院の御親翰、または市内元町の箱屋伊右エ門の宅に家宝として伝へたる菅公自筆の書などを奉納しありしが、今は其所在不明だと云ふ。

此記事は本史神社仏閣編の記事と異なる所あるも暫らく一説として其儘に掲ぐ。

大財聖堂趾

白山町の人、武富成亮の創建する所である、成亮は廉斎と号し篤学の士であつた、元祿三年

聖堂建設の願を藩庁に出したが、藩では未だ其例なければとて更に公儀に伺ひたるに、同四年幕府は大成殿を建てたる後、翌五年之を許可した、依て大財町六反田に、地を相し同七年完成、孔子、顔子及び曾子を祀り、その講堂を鳶魚斎といひ、其家塾を依仁亭と称し、太夫、士庶人に経伝を講し、正徳二年初めて積菜を行ふた、今其跡を訪へば「大宝聖林碑」の篆額ある石碑を靈亀の負ふあり、此碑の西數十間に質素なる成亮の墓あり、前蔵相武富時敏の邸宅か即ちソレである。(本史教育編第二章一節参照)

八戸城趾

八戸町天祐寺の北側にあり、其創設詳かならざるも、八戸宗暘並に其父胤宗の居城であつた、

胤宗は祖先、高木肥前守宗貞に出で、文治年間源頼朝の恩顧を蒙り、代々於保郷を知行としてゐた、宗貞の庶子、於保二郎宗益初めて肥前の執行職となる、其後十餘代を経て備前守胤宗に至り、龍造寺剛忠の女を娶り、宗暘等を生む宗暘また龍造寺隆信の妹と婚して重縁を結び、八戸、新庄、於保、益田、木角、蠣久、成導寺、嘉瀬、諸隈等を領してゐた、左れど宗暘は常に隆信と隙あり、一時は隆信の母の命に依り許されてゐたが、千葉神代等と與みし、隆信に敵対したので隆信怒りて、天文二十二年遂に之を亡した、宗暘は一時遁れて、神代氏に拠り北山附近に在つたが、今山合戦の際大友方に属し、杜山(野山)に戦死を遂げた。

八戸の地藏菩薩 其高さ七尺七寸、胴の廻り一丈三寸、重量一千斤と云ふ地方には珍らしき金仏で、「八戸の地藏さんナ堂がない」と、子供に唄はれて慈悲忍辱の姿を雨露に曝された座像である、宝曆六年(紀元二四一六年)十月長瀬町の鋳物師、谷口安左エ門の鋳造する所である。

伝説に依れば支那大陸の沿岸を脅かした、八幡船へ関係ある兄弟三人(名を逸す)の密輸入者があつた、長兄は捕へられて嘉瀬刑場の露と消へたが、他の二人の兄弟は常に之を悲しみ、又自己の犯した罪業消滅の爲め仏門に帰依しるたが、次兄は長兄の靈夢に被むり、弟と協力して地藏菩薩を鋳造すべき地金を、三万三千三百三十三人から喜捨を仰がんと、諸国行脚の途に就き、三年の後帰り来りて谷口安左エ門に鋳造を依頼し、安左エ門は龍雲寺境内に工場を設け、茲に慈悲圓滿の地藏尊の像を鋳造し、八戸町に安置(現在)したと云ふ、明治時代までは、寒に佐賀市唯一の仏像にして八戸町の一異彩であつた。

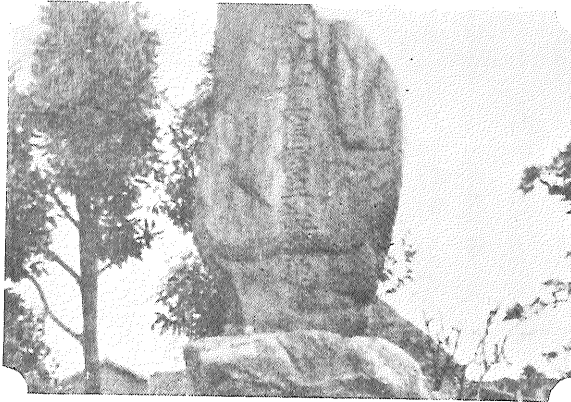
築地の反射爐趾 鍋島閑叟が長崎防備の急務として、長瀬町の北側(日新小學校所在地附近)にて、西洋に恥ぢぬ大砲を製造すべく、嘉永三年十月、洋式鋳砲の反射爐を備付けた大工場の跡である、直正(閑叟)は先づ近侍の本島藤太夫を、豆州華山の江川英龍の許に遣り、新砲臺築造の事を問はしめ、杉谷雅助、田代孫三郎等に原書を訳し之を講究して、鋳造に着手し、幾度か失敗を累ねて遂に其の經驗と智識とに依り、此の事業を達成した、実に本邦未曾有の大事業の趾である。

そして嘉永五年長崎港外の神ノ島、伊王島に幾多の大砲を据付け、港内外の防備に嚴重を加へるに至つた、彼の露国使節プーチヤチンが艦隊を率ゐて、嘉永六年十二月互市を開くの回答を再び求めに來りし際、幕府は長崎に於て応接せしめ、幕吏は彼れの要求を拒絶したが、露使は何等の抗議をも為さず辞し去つた事は、長

崎の備砲巖然たるに喫驚せし為めであると伝へられてゐる。(本史兵事編第
二章一節参照)

多布施の反射爐趾

多布施の反射爐趾は多布施町河畔、岸川町の北側にあり、嘉永六年外国の軍艦数隻、相州浦賀に來りて開港を迫り、人心恟々、物情巖然たるものあり、而も互相沿岸の防備薄弱にして、彼の要求を拒絶する力がないので、幕府は狼狽して至急葦山の江川英龍に命じて、沿岸防備の大砲鑄造の事を以てし



大隈重信侯誕生地記念碑

た、英龍は其手代を佐賀に急派し反射爐築造の件に付教へを請はしめた、同年八月幕府の阿部閣老は、江戸品川湾に大砲を据付けんとして我藩に、其の鑄造を依頼したので、藩主直正は之を諾し、前記岸川町北側に地を相し、「公儀御用石火矢鑄立方」と標札を掲げ、前の築地反射爐より規模を大にして、巨砲を鑄造し鐵製三十封カノン砲二十五挺、同二十四封カノン砲二十五挺を鑄し、安政三年までに全部を輸送し、別に鐵製百五十磅カノン砲三門を鑄て幕府に献じ、紀淡海峡の防備に備へた、右巨砲は品川砲臺に据付たが、我佐賀藩が我国大砲鑄造の始祖と謂はるゝ所以である(兵事編第二
章二節参照)

大隈侯誕生地

世界的偉人として、内外に喧伝された大隈重信侯は、市内水ヶ江町会所小路の出身である、大正八年、財団法人大隈重信侯誕生地記念会を組織し、其幼年時代、起臥読書し

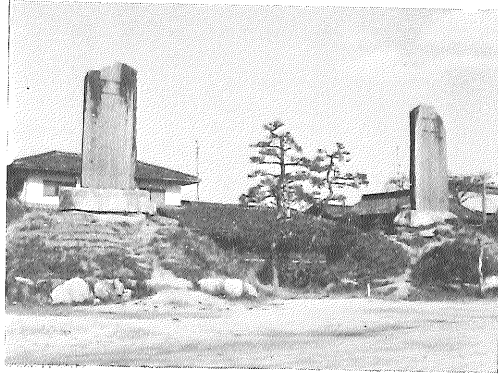
て居た、会所小路の旧家屋を記念館とし、境内に記念碑を建設し、館内には各種の遺書、藏書及び遺品を保存して、青年子弟の教養訓育に資してゐる、境内九百四十九坪の敷地内には東京早稲田の庭園より送附して来た、侯が遺愛の樹木をはじめ幾多の花弁を植えて、小公園となし、体育奨励の一助たらしむべく運動場をも設けてゐる、記念碑は佐賀郡金立村の溪谷に在りたる御影石で、何等の裝飾をも加へず、其儼建設してあるが高さ一丈二尺、幅四尺ありて表面の文字は、記念会総裁波多野敬直子の揮毫、裏面の碑文は当地出身の文学博士久米邦武の撰文、書家於保謙致の筆で、大正十一年五月十四日除幕式を行つたものである、其墓は菩提寺たる市内與賀町龍泰寺小路なる龍泰寺にある

副島伯記念碑

明治維新の元勳にして功績偉大なる伯爵副島種臣の誕生地は、赤松町南堀端にあり、大正九年六月、中村純九郎、古賀廉造等相謀りて其地に記念碑を建てた、種臣は実に畏敬の人物で、常に国威の宣揚を念とし、天下の広居に居り天下の大道を行く人であつた、明治六年邦人加害事件で、清国に對する稟乎たる主張を以て、嚴重なる応酬を為したるが如き、上下齊しく嘆稱する所であつた、明治十七年華族に列せられ伯爵を授けられた、明治三十八年一月病を得て薨去した、享年七十八歳である

大木伯記念碑

水ヶ江町龍谷中学校の南方に、同型二基の記念碑がある、一は明治維新の初め廟堂に起ち、文部大臣として国民教育の基礎を定め、また司法大臣として司法制度の創定に盡瘁し、幾多の功績を残した伯爵大木喬任の記念碑にして、一は司法大臣、鐵道大臣であつた其の嗣子伯爵大木遠吉の記念碑である、此父子の偉績を永遠に偲び、政教振作に資する為め、昭和二年財団法人大木伯記念会を組織し、父喬任が壯年時代、常に読書修養し、或は同志と共に勤王倒幕を説き、或は天下の大勢を論じた縁故の地(或は旧邸宅跡とも云ふ)たる同



大木伯の記念碑

所に、記念碑を記念会より建てたもので、昭和二年十一月廿七日成就し、頗ぶる偉観を呈してゐる、父子相次で臺閣に列するは蓋し異数とする所である

佐野伯の胸像

幕末、維新前後に当り、偉大な勲功を樹てた、日本赤十字社の創立者で、其社長であつた伯爵佐野常民の旧邸宅跡である水ヶ江町枳小路、及び其の生地である、佐賀郡中川副村早津江に、大正十五年赤十字社創立五十周年を機とし、同社でソレ／＼記念碑建設を計画せられ、早津江の生地地へは同年十二月、見事な記念碑が建てられたが、水ヶ江町の方は其後変更せられ、赤十字社佐賀支部の境内に、其の胸像を建つこととなり、昭和三年四月除幕式を行つた、其の事歴等は本史人物編を参照ありたし。

古賀聯隊長銅像

羅南らなん騎兵聯隊長、騎兵大佐古賀伝太郎の銅像

は城内にあり、空閑少佐の銅像と隣りし北側に建てるが古賀大佐の銅像である、彼は佐賀郡南川副村の人、昭和七年一月支那錦西方面の兵匪討伐に際して、二千有餘の匪徒の襲撃を受け、其の重囲に陥り此時古賀大佐は手兵纒かに六十騎を以て此の敵に当り、勇戦奮闘、能く聯隊旗を死守し善戦したが、衆寡素より敵し難く、多数の部下と共に名譽の戦死を遂くるに至つた、其後古賀大佐顕彰会に於て、昭和十年七月此の地に銅像を建て之を顕彰した、銅像は劍を抜いて敵を睥睨せる立像である。

空閑少佐銅像

空閑少佐の銅像は、古賀大佐の銅像と相竝んで、昭和十一年九月建設された、即ち空閑少佐顕彰会に於て古賀大佐銅像の南側に建設した、空閑少佐は其名を昇と云ひ市内片田江の人である、昭和七年二月三日支那江灣鎮の激戦に参加し、江灣鎮西端の敵陣地攻撃に当り、進撃を続けて敵家樁の奥地に突入り、大隊との連絡を断たれ纒に三十餘名の部下と共に三晝夜の悪戦を続け、遂に重傷を被りて人事不省に陥り、其自覚せし時は敵方の真茹病院に收容されてゐた、ソレより無錫、宜興に送られて南京の和橋鎮病院に移され、三月十五日我軍の捕へし捕虜四十餘名を返還し少佐は上海の我が兵站病院に歸つた、此間隱忍三句餘の日子を送り、此時に部下の功績調査書、大隊の戦鬪詳報などを完全に作成し、三月廿八日林聯隊長を首め、部下將兵の戦死を吊ひ、自己戦場の後を訪ふて

たらちねの親の教を守りてぞ

弓矢のみちを我れは行くなり

の辞世を残し従客として武士道に殉し、悲壯の最期を遂げた、其墓は市内水ヶ江町新道の宗龍寺境内(門を側)に在り。

日親上人銅像

日親上人は応永十四年九月、上総国に生れ深く三宝に帰依し、幼時下総国中山法華經寺に入りて、日蓮宗門の蘊奥を究め、一天四海皆歸妙法の大願を立て、四方に巡錫し、宗義弘通に精進すると多年、曾て宗祖日蓮の立正安国論りつしょうあんこくろんに因みて立正治国論りつしょうこくろんを撰して、時の將軍足利義教の爲めに幾度か酷刑を科せられ、灼熱の燒鑪を其の頭上に冠せられたこともあつた、世に「鍋かぶり上人」と云ふは此の日親上人の事である、而も日親は些しも退轉の色なく、益々勇猛精進して、献身護法に邁進したと云ふ。

其の当地に来るや、小城郊外の竹原に堂宇を建て、竹原山妙覚寺と名け茲を法障として、他宗の怨嫉受難の裡に布教を続けた、妙覚寺は実に当地方に於ける、其の最初の布教の霊場であつたが、其後正保年間、現在の当市岸川町に移転し茲にまた其の靈跡を偲ぶに至り、此の靈跡を後昆に伝ふべく、昭和十二年十月十九日、寺の境内に日親の銅像を建設し、当地に於ける彼の靈跡を新にしたのである。

右の外尚ほ法勝寺の執行「俊寛僧都の墓」、藩政時代の死刑場、死刑囚と其縁者が今生の別れをなせる「別れの松」等、市外西部の一里許りにあれど郡部に属する地なるを以て、これが掲載を避ける事とした。

第三節 天然記念物

城濠の蓮華 旧佐嘉城を囲む一里四方の城濠は、天下に名たる大濠にして、北堀端一帯の城濠こそ今は浚渫されて、蓮の一株をも止めざるが、南堀端から東、西一部の城濠には、七、八月の候に至れば、毎年紅蓮、白蓮の花葩はなびら、翠したる葉色の中に艶を競ひ芳香を放ち、その花の多きことも亦、全国稀に見るところだと称せられてゐる。

行々子 渡り鳥にして鶯科の鳥である、「よしきり」、「おほよしきり」又は「よしはら雀」などの名がある、「つくみ」ぐらいの大きで、尾は短かく、羽色は鶯に似てゐる、池沼の芦原に棲み、その声喧しく、毎年初夏の頃より晝夜となく囀るが、冬は印度地方に渡ると云ふ。

菱 佐賀市附近一円の濠池に産する水生植物にして、茎は分歧し、茎の各所に絲状に根を發生してゐる、柳葉菜科の一年生草だと云ふ、堅き核果を結ぶ、其実は三角状を為し、下の二角に鋭利なる棘とげあり、七、八月

の交より十月頃までに取て之を茹^ゆで市中に販ぐ、味ひ佳なり、民間薬として胃痛によしと云はれ、また酒毒を消すと云ふ、県内各地にも産するが佐賀郡最も多く年産額約二千餘石、価額約壱万四千餘円に達すと云ふ。

泥^{ひじょう}猴^{こう}魚

有明海沿岸の瀉地、即ち淡鹹両水の相交はる浅海の静穩なる泥底に、穴を穿ちてその中に棲息するが、全身に紺^{かき}形^{がた}の斑点を有し、異様の姿をなせども、肉は脂肪に富み、蒲焼きにして食膳に供すれば、味ひ頗ぶる美にして世人に称せらる。

勝ち鳥

燕雀類中の鳥である、普通には「鶻^{かく}」と称せらる、翼長さ十八糎ぐらい、頭、背は光沢ある黒色にして羽及び胸に白斑あり、尾長くして黒緑色の光沢がある、嘴、脚は黒色で、支那、朝鮮、臺灣及び九州の北部等に棲息する、害虫を啄む益鳥であると謂はれる。

往昔鍋島直茂、豊太閤の朝鮮の役に出陣せる時、同地に於て之を捕獲し凱旋の際持帰つたもので、韓土に於て「肥前勝ち〜」と鳴きつゝ、軍の嚮導をしたとの伝説に依り当地方で勝鳥といふ、又佐賀地方に棲息するので「肥前鳥」ともいふ、多くば、楠、榎等の高樹に巢を営む、大正十二年三月七日内務省告示第五十七号を以て天然記念物に指定されてゐる。

第一章 娛樂場

第一節 劇場

喜樂座

與賀町與賀馬場に在り、佐賀市に於ける最も久しき劇場にして、その創立年月日等に就ては之を詳記し難きも、明治十四、五年頃の設立であらうといふ、初め喜樂舎と謂つてゐたが、大正三、四年頃より喜樂座と稱へ今日に至つてゐる。

新榮座

松原町新馬場にあり、市内の劇同好者が自己観劇を樂む傍ら、一般公衆の劇場を建設すべく、明治十七年の頃創設した劇場で、初め松榮座と云ひ後ち新榮座と稱してゐた、明治四十四年十一月株式組織に改め、「株式会社新榮座」と稱へ、依然演劇その他を開演してゐたが、大正十三年八月二日より活動映画の常設館となり、次で映画館の館名を、昭和館と唱ふるに至つた。

佐賀劇場

會て福岡市に於ける九州沖繩八県聯合共進會当時の演藝館を、大正五年頃、古賀小一これを拂下げ、市内材木町一ノ橋に移転建築して劇場となし、その当時改良座と稱へてゐたが、大正八年五月頃に至り榮樂座と改稱し、今は佐賀劇場と稱へ、持主も実川延十郎となつてゐる。

神野劇場

大正十三年十二月、神野町草場に新築起工、翌十四年七月竣工、一口五拾円の六百株から成る株式組織で、代表者は佐賀郡春日村の千々岩百太郎であつた、大正十四年七月落成式を挙行し、初興行（柿草落）として大阪俳優の実川新四郎、市川鯉三郎一座六十餘名の歌舞伎興行を演じた。

南舞座

水ヶ江町新道にあつた寄席である、昭和二年五月十七日落成式を挙行し、初興行として尾上梅香一座の演藝を開演し、爾後引きつゞき各種の演藝を催し、古沢弥三郎及び小宮佐代太等が経営してゐたが、約一ヶ年ばかりにして閉座したのは、惜いことであつた。

第二節 映畫常設館

朝日館

大正四年十一月一日の創設で、佐賀市に於ける最古の映畫常設館にして、水ヶ江町新道にあり、初め大勝館と云つてゐた、其後經營者も転々として代はり、昭和三、四年頃には朝日館と改称し、唐人町の高柳徳一これを經營し、日活会社、千恵蔵映畫会社等の、映畫を上映して今日に至つてゐる。

宇宙館

白山町土橋にあり、大正十年頃蓮池町松本浅市これを創立し經營してゐたが後、宮崎莊太郎その經營を引受け、松竹会社、及びP、C、L会社等の映畫を上映してゐる。

日ノ出館

伊勢屋町の東詰めにあつた、その創立年月等は不詳なるも、大正十年以後の新築かと思ふ、市内西部に於ける唯一の映畫常設館で、新興映畫会社の映畫を上映してゐたが、昭和十四年頃東松浦郡相知町の杉本重利、その經營を譲り受るに及び、同館を松原町松原通りの元佐賀警察署跡に移転建設して開館し、斯くて日ノ出館を閉館する事となつた。

昭和館

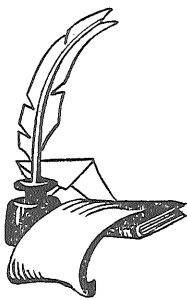
松原町新馬場の劇場「新榮座」を以て映畫館とし、大正十三年八月二日から、紺屋町山口又次これを經營してゐたが、昭和二年頃から其兄山口文作の經營するところとなり、館名をも昭和館と改称し、極東映畫、大都映畫などの映畫を上映して今日に及んでゐる。

東寶映畫劇場

昭和十四年六月五日新築落成して開館した映畫常設館で、此日、出征軍人遺家族等を招待慰安し、翌日より一般に公開した、杵島郡大町町の中山末一の經營するところで、初め昭和十一年十二月、

神野劇場を引受け映画館を經營してゐたが、地利上の關係もありて同映画館を松原町松原通り元佐賀警察署跡地に移すこととなり、此に新築開館したものである。

世界館 東松浦郡相知町の杉本重利、前記伊勢屋町に在つた映画館「日ノ出館」を引受け、經營する内、現在の場所、即ち松原町松原通り元佐賀警察署跡地に、「日ノ出館」を移転新築（東宝映画劇場の南側）して、名も世界館と改め經營せるものであるが、其の後、杉本の手を放れ今は松竹株式会社が其の經營をも引受てゐると云ふ。



昭和二十七年四月二十日印刷
昭和二十七年十月一日發行

佐賀市史下卷 **【非賣品】**

佐賀市松原町七一

編輯兼 發行者 **佐賀市役所**

佐賀市紺屋町三丁目八六

印刷所 **佐賀製帳社**

複刻 佐賀市史下巻

昭和48年1月22日印刷

昭和48年2月19日発行

刊行

佐賀市

佐賀市長 宮田 虎雄

印刷所

福博印刷株式会社
佐賀市兵庫町修理田72の2

このページは本複刻に当り新たに加えたものです。また、この複刻版は、本版を写真製版したもので、当時の用紙事情等で不鮮明な所があるかと存じますが、ご了承願います。なお写真の一部は、印刷の都合上再撮影したものがありますので併せてご了承願います。